

勝利以上に目指すもの

京都府

京都下り松道場

中学1年 遠山史桜

中学生になり、剣道を始めました。元々、父と弟が剣道をしていたということもあり、剣道を習う前から、私にとって剣道は身近なものではありました。しかし、実際に剣道の稽古を始めてみると、家族が稽古をしているのを傍で見ていた時とは全然違う印象を抱くようになりました。

これまで剣道に対しては、どちらかというと、勝負の一瞬のために日々鍛錬をするものというイメージが強く、道場で稽古をしている人たちは、皆、試合に勝つために厳しい稽古を積んでいると思っていました。私も例にもれず、稽古を始めた当初は、少しでも早く皆に追いつき、互角に戦えるようになりたい、試合に勝てる強さを身に付けたいとばかり思って稽古をしていました。

ところが、剣道の稽古を重ねる中で、剣道の稽古は、ただ試合に勝つためだけに行うものではないのではないかと思うようになりました。まだ稽古を始めてからの日も浅く、剣道のことは知らないことの方が多いです。それでも私の中で剣道には、これまで学校の体育の授業を通じて体験してきた他のスポーツやテレビ中継で見かけるオリンピック競技などとは一線を画すような、単なる勝敗を競うだけのスポーツとは言えない要素、奥深さがあると感じています。

例えば、剣道の袴。前に五本の折り目が入っています。これは、儒教の教えである「五倫五常の道」を諭したものと言われています。五倫とは、基本的な人間関係を規律する五つの徳目を表し、五常とは、人が常に守るべき五つの徳目を表します。いずれも、人が社会の中で一人では生きていけない存在で、自分以外の他者によって生かされている存在である以上、個々が意識し大切にすべき事柄と言われています。それが剣道の袴に記されているということは、剣道は稽古を通じて、こうした人の心の在り方を意識し、心をも鍛えていくものだということの表れなのでは、と感じました。またそれは、試合時の所作からも窺えます。剣道の試合は、礼に始まり礼に終わります。どんな相手とどんな

勝負をしても、決して感情を露わにせず、静かに相手に対して頭を下げる。これは今日、自分という人間と剣を交えてくれた相手への最大限の敬意を表すものだと考えます。自分の感情を抑え、相手に礼を尽くすということは、心が強くないとできないことだと思います。

「心を鍛える」ということで、私はふと、半年程前まで取り組んでいた中学受験の勉強を思い出しました。私は、受験学年である六年生の一年間は「克己」と書かれたハチマキを締めて勉強をしていました。入試は、言うまでもなく、合格のためには他者よりも一点でも高い点数を取る必要があります。この点では、入試も他者との競争とも言える要素を含んでいます。しかし、本当に怖いのは、他者ではなく、自分自身の心の甘えだと教わりました。自分の中の弱い気持ちに打ち克って、日々やるべきことを淡々とこなすことが、結果的に合格に繋がる。点を取ることだけが目的ではなく、心を鍛え、自分に打ち克つことで、自ずとご縁のある学校と出会える。実際に入試を経験して、それは本当にその通りだと思いました。

剣道もよく似ていると感じます。もちろん試合をしたら、やはり勝ちたいです。そのために今よりも強くなりたいです。しかし、試合に勝つことだけを目的として、勝てれば何でも良いというのでは、剣道の世界では本当の意味で強くなるとは言えないのではないのでしょうか。

私の剣道の道は、まだ始まったばかり。こうしたことをしっかりと胸に刻み、今日も袴の折り目をきれいに整え、稽古に臨みます。技だけでなく心をも鍛える。これこそが、剣道の奥深さであり、私が剣道を通じて、勝利以上に目指すものなのです。